

# 『ヴェローナの二紳士』における友情

高根 廣大

[キーワード：①友情 ②助言 ③人文主義 ④ジェンダー ⑤階級]

## 序論

ヴェローナの紳士であるプロテュースはジュリアという恋人がいるにも関わらず、親友ヴァレンタインの後を追って渡ったミラノで、彼の恋人シルヴィアを愛してしまう。シルヴィアへの愛を取るか、それとも、ヴァレンタインとの友情を取るか。シルヴィアへの愛を取れば、ヴェローナに残してきた恋人ジュリアをも裏切ることになる。『ヴェローナの二紳士』(*The Two Gentlemen of Verona*, 1590-1594)<sup>1)</sup> という喜劇における混乱は、こうしたプロテュースの内的葛藤によって引き起こされる。プロテュースが友人を裏切り、後悔し、許されるという筋書きの中で、恋人たちの友情において何が問題となり、どのような倫理的価値が試されているのか、本論ではルネサンス期の友情論と比較して論じていく。

ルネサンス期イングランドにおける友情論の土台となっていたのは、キケローの『友情について』(*De Amicitia*) であるが、そこで理想とされたのは対等かつ、有徳の者同士の友情である。John D. Coxはこのような理想と、ルネサンス期イングランドが抱えていた階層社会と競争主義という実情が相反していることを指摘し、シェイクスピアはこのような考えに懐疑的であったのではないかと論じている<sup>2)</sup>。たしかに、シェイ

クスピアの作品では『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*)の商人アントーニオと紳士バサーニオの關係に代表されるような支援者と被支援者の間の友人關係や、『ハムレット』(*Hamlet*)におけるハムレットとホレイシヨウのような主従における友人關係が多い。立場上対等と言えるのは、『ヴェローナの二紳士』のヴァレンタインとプロテュースの他には、『冬物語』(*The Winter's Tale*)のレオンティーズとポリクシニーズ、『二人の血縁の貴公子』(*The Two Noble Kinsmen*)のパラモンとアーカイトくらいである。

キケローや彼に影響を受けたルネサンス期の人文主義者たちの友情論におけるもう一つの特徴は、彼らが基本的に友情論を男性同士のものとして議論している点である。Tom MacFaulは女性に対する性的欲望を男性同士の友情でいかにして制御するかが人文主義者たちの関心であったと指摘している<sup>3)</sup>。人文主義者たちは、一般に男性は女性よりも理性に優れていて、首尾一貫していると考えていた。そして、女性に対する欲望さえ制御できれば、男性はより人間的に成熟すると期待したのである。これに対し、Laurie ShannonはMacFaulと同様のことを指摘しながら、別の見解も提示している。すなわち、友情という男性同士の人間関係における美德に相対するものとして、女性の貞淑という美德を挙げているのである。たしかに、どちらも一貫して強固な人間関係を理想としている点では、共通していると言える<sup>4)</sup>。

本論ではこうした先行研究の視野をふまえ、『ヴェローナの二紳士』における友情が対等なものなのか、そして、その友情は男女という性差によってどのように異なるのかを、キケローやルネサンス期イングランドの人文主義者の思想と比較しながら論じていく。その際出発点となるのは、そもそも有徳の者同士の友情というのは、どのような徳において優れているのかという点である。本論ではこれを助言における倫理と知識、さらにはその前提となる社会階層であると定義して議論していく。そうすることで、初めて性差を問わず友情において対等かどうか、ある

いはまた、どのような友情が理想的かを論じることができると思われる。そのうえで、このような友情論における美徳が、本作品でプロテュースの心変わりによって引き起こされる混乱を收拾させることになるのだとすれば、それがどのような劇的展開の中で描かれ、試され、理想化されているのかを分析していきたい。

## 1. ルネサンス期の友情論とプロテュース、ヴァレンタインの美徳

共和制ローマの末期に活躍した雄弁家であり政治家でもあったキケローの『友情について』は1481年にJohn Tiptoftによる最初の英訳が出版され、何世代にもわたって学校で生徒たちの言語教育と倫理教育の教材として使用されていた<sup>5)</sup>。その中でキケローは、「秀れた人々の中にしか友情はありえない」し、「徳なくしては、友情もその他の追求すべきものも、達成できない」とした。彼の言う「秀れた人々」や「徳」を持った人の条件の一つは、互いに助言をし合うことで理想的な人間関係を構築できる人々のことであった。キケローにとって、「忠告を与えかつ与えられること、一方は率直に、しかし苛烈にならぬよう行い、他方は嫌がらず我慢して受けること、これが真の友情の本分であるように、友情には阿諛、おべっか、追従以上の害毒はない」のであった<sup>6)</sup>。

こうしたキケローの考えを踏襲して、ルネサンス期の人文学者たちは理想的な友人関係を議論する際に“counsel”や“advice”といった、「助言」や「忠告」を意味する言葉をキーワードにしていた。代表的なものは、デジデリウス・エラスムスの*The Education of a Christian Prince* (1516)や、バルダッサレ・カスティリオーネの*The Courtier* (1528)、サー・トマス・エリオットの*The Book Named the Governor* (1531)などである<sup>7)</sup>。彼らが助言にこだわった理由の一つには、当時の社会状況があるように思われる。軍事奉仕の機会減少と貴族の数の増加は、従来の貴族のアイデンティティを揺らいでしまった。一方、助言をするためには、知識や雄弁術が

必要であり、それを身につけるために教育を受けるのは、経済的に余裕のある者に限られた。また、助言をすることは、主君への奉仕や公共の福祉への貢献に結びつくと考えられていた。したがって、助言を重要視することによって、人文主義者たちは貴族としてのアイデンティティを確保し、同時に人文主義者自身が多く所属した新興階級をそのアイデンティティの中に組み込むことができたのである<sup>8)</sup>。エリオットは、1531年に出版されてから、1580年までの間に七度再版された*The Book Named the Governor* において、次のように書いている。

Therefore it is seldom seen that friendship is between these person, a man sturdy, of opinion inflexible, and of sour countenance and speech, with him that is tractable, and with reason persuaded, and of sweet countenance and entertainment. Also between him which is elevate in authority and another of a very base estate or degree<sup>9)</sup>.

エリオットは友情が成立しない例として、「融通の利かない考えの持ち主」(of opinion inflexible) で「重苦しい態度と話し方をする人」(of sour countenance and speech) と、「聞き分けの良い人」(with reason persuaded) で「快い態度で楽しませることができる人」との人間関係を挙げているが、これは同時に友情を築ける人とそうでない人を対照的に示している。すなわち、助言を進んで聞き入れ、かつ自分も相手が進んで聞き入れられるような助言をできるような人こそ、理想的な友人関係を築くことができると考えたのである。楽しませるような助言をするには、知識と雄弁術が必要であり、それを聞き入れることを称賛するのは、助言者の地位を確保することにつながる。これはまさにエリオットが階層社会を意識して助言と友情を議論している例だと言えるが、それ以上に明示的で、かつキケローにない表現が引用した最後の一文である。エリオットは友情論において、「権威者」(him which is elevate in authority) と「非常に卑

しい身分や階級の者」(another of a very base estate or degree) というように、道徳や才芸だけでなく、明らかに社会階層の違いを問題にしているのである。

『ヴェローナの二紳士』では、助言に関する多くの語彙が使われている。実際、プロテュースとヴァレンタインという二人の紳士の友情は助言によって支えられている。たとえば、冒頭で二人が互いの別れについて話すとき、ヴァレンタインの初めの言葉は「おれを説得しようとするのはよしてくれ。」(Cease to persuade) である(1.1.1)<sup>10)</sup>。一通り会話した後でヴァレンタインは「君に意見をしてみても、時間の無駄だ」(wherefore waste I time to counsel) とあきらめると、プロテュースもまたヴァレンタインを見送ったあと、恋に夢中な自身は「忠告にさからっている」(War with good counsel) と反省している(1.1.51, 68)。二人の別れが助言し合う関係の終わりと共に訪れるのである。

二人の関係は彼らがミラノで再会することによって一時修復される。ヴァレンタインがシルヴィアとの駆け落ちを相談する相手は、昔からの友人プロテュースであり、彼は「おれの部屋まで来て、君の助言を聞かせてほしい」(go with me to my chamber / In these affairs to aid me with thy counsel) と頼むのである。ところが、この関係もプロテュースが「先に行ってくれ」と答えて一人舞台に残る時点ですでに暗雲がたちこめている。助言をすることに対する時間的な距離が、のちに友人関係における心理的な距離となって表れているのである (2.4.182-3, 184)。

助言が人間関係において重要な働きをしているのは、二人の友情だけでなく本作品の多くの人間関係についても言えることである。たとえば、一幕二場でジュリアが初めて登場するときには、侍女ルーセッタに「私に恋をしろとすすめるの？」(Wouldst thou then counsel me to fall in love?) と話しかけるところから始まるし、二幕七場で別れたプロテュースのあとを追うべきか思案する場面でも「ねえ、やさしいルーセッタ、教えてちょうだい」(Counsel, Lucetta; gentle girl, assist me) という言

葉から始まる (1.2.2., 2.7.1)。アントーニオもまた息子プロテュースに関する召使いパンシーノーの提案を受け入れ、「その意見、気に入ったぞ、よく言ってくれた。」(I like thy counsel; well hast thou advised.) と言っている (1.3.47)。ミラノ公爵が駆け落ちしようと企むヴァレンタインをひきとめるときも、「私に重大な関わりのあることを、お前に打ち明けたいのだ」(I am to break with thee of some affairs / That touch me near) と言って相談を持ちかけ、さらに公爵はプロテュースにも娘シルヴィアとシューリオとの仲に関して、これまで以上に「ますます相談にのってくれないか」(Makes me the better to confer with thee.) と依頼しているのである (3.1.59-60, 3.2.19.)。

『ヴェローナの二紳士』では助言に支えられた人間関係がいくつも描かれているが、ここではエリオットが友情論において論じたような助言に関わる道徳や才芸、社会階層の相違などが非常に重要な意味を持っている。たとえば、ヴァレンタインがプロテュースをミラノ公爵に推薦するとき、「彼こそは容姿、才能ともに一点の非のうちどころなく、紳士の飾りたる美点をことごとく飾り備えた男です。」(He is complete in feature and in mind, / With all good grace to grace a gentleman.) と言って称賛すると、ミラノ公爵は「ほう、たいしたものだな、そのとおりの男なら彼は女王の恋人たるにふさわしく、また大公の顧問官として適任と言わねばなるまい。」(Beshrew me, sir, but if he make this good, / He is as worthy for an empress's love, / As meet to be an emperor's counsellor.) と答えている(2.4.71-75)。ここで評価されている「紳士の飾りたる美点」とは、ミラノ公爵にとっては「顧問官」になりうる人物としての美点であり、そうした紳士としての能力と社会階層を持って初めて「女王の恋人」、すなわち本作品においてはミラノ公爵の娘シルヴィアの恋人にふさわしいということになる。

ただし、ヴァレンタインの言うように、プロテュースが実際にミラノ公爵の顧問官として、またシルヴィアの恋人としてふさわしいかとい

うのは大いに問題である。というのは、この場面ではヴァレンティンはプロテュースを売り込むために誇張しているとも言えるし、ミラノ公爵のほうも「そのとおりの男なら」と条件づけているからである<sup>11)</sup>。実際、助言に関わる才芸と紳士としてある程度の地位があると言っても決定的なほどではなく、なによりプロテュースは助言に関わる道徳性に欠けている。特に本作品の中盤以降などはいかにプロテュースが追従的な助言を用いて人間関係を混乱させるかが描かれているのである。

すでに述べたように、『ヴェローナの二紳士』では、二人の紳士以外にもジュリアとルーセッタ、アントーニオとパンシーノー、ミラノ公爵とヴァレンティン、プロテュースというように助言が介在する人間関係が描かれているが、これらはプロテュースとヴァレンティンの友情とは異なり、いずれも主従関係にある。シェイクスピアが二人の紳士という身分上対等な関係を本作品の中心に置きながら、それと同様に助言が介在する関係として主従関係を多く描いているのは興味深い事実である。Coxはシェイクスピアがキケローの友情論に懐疑的であったのではと論じる際に、エリオットの議論にもまたキケローへの同意とともに、それに対する理論的な矛盾が生じていることを指摘している<sup>12)</sup>。『ヴェローナの二紳士』は、シェイクスピアが彼と同時代の人文主義者同様、共和主義者キケローの思想を君主制のルネサンス期イングランドで受容する過程で執筆されたものなのである。

一方で主従関係において助言が介在する関係は、身分的に対等な関係よりもシビアである。巧みに助言する知識と技量を持っていたとしても、ただちにそれだけで助言し合う親密な関係が構築されるわけではない。実際、上述した主従関係においては仕える者が主君に対して助言するだけの一方向的な関係である。対照的に、身分的に対等に近い場合、互いに助言し合うような親密な関係はあらかじめ作られている。ミラノ公爵とシュリーオの関係がその例である。実際は才覚に欠けるシュリーオが公爵に助言をする場面は見当たらないが、逆にシルヴィアに好かれず嘆

くシューリオに公爵が助言をする場面は見られる (3.2.1-10)。ヴァレンタインが公爵に追従的に評して言うには、シューリオは「美德、寛容、人品、才能など、どこから見ても姫を妻に迎えるにふさわしい紳士」(full of virtue, bounty, worth and qualities / Beseeming such a wife as your fair daughter) であり、公爵もそれを否定しない (3.1.65-66)。

ミラノ公爵のヴァレンタインへの態度は、シューリオへのものとは異なる。例としてあげられるのは、ヴァレンタインのシルヴィアとの駆け落ちを止めようとして、公爵が自分の意中の女性を口説く話を持ちかける場面である。公爵は初めこそ「お前を私の家庭教師にしたい」と言い、「お前を由緒ある家柄の紳士と信じて聞く」と彼の立場を持ち上げる (3.1.84, 3.1.121-122)。しかし、これはヴァレンタインのシューリオを評価する際の追従や、表面的には恭しい態度を取り裏で公爵の娘との駆け落ちを企むヴァレンタインの追従的な態度に対する皮肉にすぎない。実際、公爵はヴァレンタインのシルヴィアへの手紙を見つけて次のように激怒する。

Go, base intruder, overweening slave,  
Bestow thy fawning smiles on equal mates,  
And think my patience, more than thy desert,  
Is privilege for thy departure hence. (3.1.157-160)

ミラノ公爵にとって、ヴァレンタインは「媚びた笑顔」(fawning smiles) で近づき、知らぬ間に身分の境界を越えようとする「闖入者」(intruder) である。追従的な態度はたとえ身分上「同等の者」(equal mates) に向けたとしても忌避されるものに違いないが、公爵はそれが身分上異なる自分に向けられたことに激怒する。ミラノ公爵がヴァレンタインを受け入れるには、五幕四場でヴァレンタインがシルヴィアへの愛をかけて堂々とシューリオに挑むのを見て、紳士としての勇氣と美德を十分に兼ね備



えていることを認めるまで、待たなければならない。そうして初めて、公爵はヴァレンタインの「比類ない才能」(thy unrivalled merit)を評価し、「新しい地位」(a new state)を与えることになるのである(5.4.142)。

キケローの友情論では助言し合うことで対等な友人関係が築かれたが、本作品でも対等な友人関係は助言し合うことで築かれる。一方、ルネサンス期の人文主義者たちは、キケローの友情論を受容する際、これを主従関係の中で応用した。たとえば、エリオットは*The Book Named the Governor*において、社会階層の序列と君主制を国家に必要なものとした一方で、君主が専制に陥ることを危険視し、知識と経験を備えた臣下が君主に助言して支える関係を理想としている<sup>13)</sup>。また、カステリオーネの*the Courtier*では、宮廷人の最大の目標は主君に助言し徳政に導くことであるとされた<sup>14)</sup>。シェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』でも、やはり助言は友人関係だけでなく、主従間の親密な関係にも重要な役割を果たしている。しかしながら、どれだけ親密になっても、主従間の一方的な助言は対等な人間関係を築くどころか、むしろ社会階層の違いを強化するのに役立っている。例外は、プロテュースのように追従的な助言によって特別な好意を引き出すことに成功した場合である。これは追従的な態度を非難されるヴァレンタインとは対照的である。

プロテュースがシュリオを出しぬき、シルヴィアに言い寄ることができたのは、ミラノ公爵に気に入られ、シュリオの恋の支援者としての立場を勝ち得た結果であり、同時に邪魔者のヴァレンタインを排除することができたからであった。プロテュースは公爵の信頼の獲得と友人の排除を巧みな雄弁術で一挙に達成する。彼は公爵にヴァレンタインの駆け落ちを密告する際に次のようにして始めるのである。

My gracious lord, that which I would discover  
The law of friendship bids me to conceal,

But when I call to mind your gracious favours  
Done to me, undeserving as I am,  
My duty pricks me on to utter that  
Which else no worldly good should draw from me. (3.1.4- 9)

プロテュースは自分が信頼に足る人物であることを示すために自分が「友情の掟」(The law of friendship)を熟知していることを示唆する。たとえば、彼がヴァレンタインを裏切るようなことをしても、それは「友情の掟」を知らないからでなく、知った上でなお裏切らなければならない理由があるのだと断りを入れる。その理由とは「公爵のご愛顧」(your gracious favours)である<sup>15)</sup>。プロテュースは「友情の掟」を知る誠実な人間として、同時に公爵に恩を受けた忠実な臣下として助言しようとして見せる。言わば、彼は人文主義者たちが理想とした誠実な友情と忠実な奉仕の実現としての助言をしようとするのである。もちろん、彼の追従的な助言は皮肉にも自己の利益に忠実に、主君や友人に対して不実に行動した結果である。

しかしながら、こうした不誠実さと、それを取り繕う表面的な誠実さはプロテュースだけでなく、ヴァレンタインにも言えることである。かつて、恋をするプロテュースをからかっていたヴァレンタインはすっかり恋に夢中になり、恋の獲得競争においては言葉の誠実さを欠くことを厭わなくなっている。彼は公爵に女性の口説き方を説くときに「ほめてほめてほめちぎる」(Flatter and praise, commend, extol)べきであると言っているが、この“Flatter”は「追従を言う」という意味で、公爵がヴァレンタインを非難して言った“fawn”に近い言葉である(3.1.102)。プロテュースとヴァレンタインに対等な美德があるかという問題について、二人の追従における不誠実さを考えて答えるならば、恋に落ちた二人の態度は非常に似通っていて、ヴァレンタインを裏切ったプロテュースだけが不誠実で、ヴァレンタインは誠実であるなどとは決して言えない

のである。

## 2. 女性同士の友情と「女性的な」美德

助言し合う中で友情を培ってきたヴァレンタインとプロテュースは、宮廷での名誉を追求するため、あるいは女性の愛を獲得するため、巧みな助言をする知識と雄弁術で自らの道を切り開こうとする。相手の関心をつかむ技術はルネサンス期の宮廷では必要な才芸であり、ルネサンス期の友情論においてもタブーとされた追従との違いは曖昧で、質的にはほとんど変わらない。一方で、度を越えた誇張は当然のことながら、追従として忌避される。プロテュースが本質的に美德に欠けるのであれば、彼が最後に後悔し許されたとしても、彼とヴァレンタインとの友情は理想的であるとは程遠いだろう。しかし、シェイクスピアは彼らの友情を真に美德あるものとして描いている。そうでなければ、二組の恋人たちの関係はいびつなまま終幕を迎えてしまうことになる。プロテュースの極端な不誠実さは一過性のものでなければならぬのである。これについて、エリオットは次のように論じている。

And it is often times seen that divers, which before they came in authority, were of good and virtuous conditions, being in their prosperity were utterly changed, and despising their old friend set all their study and pleasure on their new acquaintance. Wherein men shall perceive to be a wonderful blindness, or (as I might say) a madness, if they note diligently all that I shall here after write of friendship<sup>16)</sup>.

優れた美德を有する前には心変わりすることが多く見られ、古い友人をさげすみ新しく知り合った者に興味を向けてしまう。エリオットはこれを“a wonderful blindness”や“a madness”と呼んでいる。プロテュースが

友情を裏切るような美德を欠いた行動をとった理由もまた愛の狂気である。彼はシルヴィアと初めて対面し、一人になったときに次のように独白する。

O, but I love his lady too too much,  
And that's the reason I love him so little.  
How shall I dote on her with more advice  
That thus without advice begin to love her?  
'Tis but her picture I have yet beheld,  
And that hath dazzled my reason's light;  
But when I look on her perfections,  
There is no reason but I shall be blind. (2.4.202-209)

シルヴィアを深く愛するゆえに、ヴァレンタインへの愛が浅くなってしまったとプロテュースは言う。アーデン版の編者William C. Carrollの注釈によれば、二つの“advice”はここでは“consideration”の意味であり、直接「助言」を意味するものではない。しかし、助言し合う関係が崩れたことと理性的な考えができなくなったことが同時に起こっていることは、彼の狂気が友情と深く結びついた問題であることを示している。一目ぼれのプロテュースには、「彼女の絵姿」(her picture)は見えても、「彼女の完璧さ」(her perfections)は見えてこない。これはあとの場面で、シルヴィアに受け入れられないプロテュースが、彼女の絵をもらおうとするというかたちで現れる。だが、この時点ですでに彼の「理性」(reason)はくもり、すっかり「盲目」(blind)になってしまっているのであって、エリオットが論じたように友情をないがしろにしても仕方のない状態に陥っているのである。

人文主義者たちにとって、理性がない状態は通常男性ではなく、女性の性質であった。理性に欠ける女性は打たれ弱く、移ろいやすいと考え

られていたのである。Shannonは1580年に出版され、John Florioによって1603年に英訳が出版されたモンテーニュの『随想録』(*The Essays*)を代表例として、ルネサンス期の友情論が女性の弱さを理由として女性同士の友情を想定せず、男性中心の友情論であったことを指摘している<sup>17)</sup>。本作品においても、ルーセッタはジュリアの恋人候補の相談を受ける中で、プロテュースを評価しながら、次のように会話する。

JULIA

Why not on Proteus, as of all the rest?

LUCETTA

Then thus: of many good, I think him best.

JULIA

Your reason?

LUCETTA

I have no other but a woman's reason:

I think him so because I think him so. (1.2.20-24)

ここでジュリアは、プロテュースを評価するルーセッタに「あなたがそう考える理由は？」(Your reason?)とたずねているが、ルーセッタが言う「私がそう思うから、そう思う」というのは同語反復の矛盾を抱えた理由なき理由である。このような言い方は、女性の理性の欠如を非難した者たちが女性に押しつけたイメージであると言えるかもしれない<sup>18)</sup>。その意味で、ここで言う“a woman's reason”はもはや「女性の理由」ではなく、女性への偏見によって想定された「女性の理性」がそういうものであることを茶化した表現となっているのである。

理性がないと考えられていた女性同士の友情がありえないのであれば、恋の狂気に陥ったプロテュースが理性の喪失とともに友情を失ったのも致し方ないと言える。しかしながら、人文主義者の中には女性を

擁護する立場もある。エリオットは*The Defence of Good Women*の中で、女性の「移ろいやすさ」(inconstancy) が非難される一方で、多くの貞淑な女性の例を挙げている。そして、「どうして理性が男性にのみあって、女性にはないと思うのか？」(What thynke you, is reason onely in men? is it not also in womenne suppose you?) と問い直すのである<sup>19)</sup>。エリオットによれば、女性は男性よりもむしろ理性的で慎重であり、必要に応じて男性に「賢明な助言をする」(she seme rather to giue him wise counsaile) ができるという。カスティリオーネもまた女性の宮廷人を擁護し、「多くの女性が夫である男性の利益の要因となり、しばしば彼らの過ちを正してきた」(many women have been the cause of countless benefits to their men, and have often corrected their errors.) と書いている<sup>20)</sup>。

『ヴェローナの二紳士』における女性たちもまた、他のシェイクスピア作品の女性たちと同様、脆弱ではない。プロテュースに言い寄られたシルヴィアは、「おまえは私をそんな浅はかな無分別な女と思っているの、何人もの女をその誓いの文句で欺いてきたおまえなどの、追従のことばで誘惑されるような女と？」と言ってはねつける (4.2.92-95)。エリオットやカスティリオーネが議論したように、貞淑でゆるぎないシルヴィアは、プロテュースの過ちを正し教え諭そうとするのである。また、彼女の貞淑さは同じ女性であるジュリアの心をも強く引きつける。シルヴィアはセバスチャンに扮したジュリアの話を聞き、「ああ、一人寂しく捨てられた、かわいそうなかた、おまえのことばを聞いて、私もつい涙を誘われたわ。」(4.4.172-173) と、プロテュースの不誠実な態度に苦しむジュリアに共感すると、ジュリアも次のようにシルヴィアへの共感を表す。

And she shall thank you for't, if e'er you know her.

A virtuous gentlewoman, mild and beautiful.

I hope my master's suit will be but cold,

Since she respects my mistress' love so much. (4.4.177-180)

ジュリアはここでシルヴィアの貞淑さを信頼し、それが自分の利益につながることで、すなわちシルヴィアがプロテュースをはねつけることで、自分がプロテュースへの愛を失わないで済むことを期待している。男性同士のつながりを強化し女性への支配を強めようとするのがEve K. Sedgwickの言うようなホモ・ソーシャルな欲望であるとするならば、ここに見られるのは女性同士の連帯と言える<sup>21)</sup>。言い換えれば、貞淑という美徳を備えた女性たちは男性との関わりを相談し合うことで、女性同士の友情を築くことができるのである。つまり、美徳と助言し合う関係で友情を築くことができるという点では男女に違いはないということ、この場面は描き出しているのである。

男性中心に想定された友情論の中で、女性もまた同様に美徳を評価され親密な人間関係を築くことができるというのは、プロテュースが男装したジュリアを小姓として評価する場面にも暗示されている。プロテュースは召使いのランスが自分の意を介さないことを嘆きながら、セバスチャンに扮したジュリアと比較して次のように言う。

Sebastian, I have entertained thee  
Partly that I have need of such a youth  
That can with some discretion do my business –  
For 'tis no trusting to yond foolish lout –  
But chiefly for thy face and thy behaviour,  
Which, if my augury deceive me not,  
Witness good bringing-up, fortune and truth. (4.4.61-67)

プロテュースはまずジュリアが自分の仕事を十分にこなす「思慮分別」(discretion) があることを指摘する。男性であるランスにない理性を、

本来は高貴な女性であるジュリアに見出しているのである。恋に盲目になり真実を見通すことができなくなったはずのプロテュースは、本来の姿を隠したジュリアの美德をかえって本能的に「予見」(augury)によって感知する。「育ちもよく、身分も高く、人柄も誠実」なセバスチャンはプロテュースにとって、ミラノ公爵に仕えようとして称えられるプロテュース自身やヴァレンタインと同じように、主君との親密な関係が築けると期待されるのである。

男装して自らの恋の行方を静観し辛抱強くその成就を願うジュリアの態度は、真意を隠し追従によって自らの欲望を成就させようとするプロテュースの態度と対をなすものである。どちらも自己の利益のために自分の姿を偽るのだが、プロテュースが欲望に対し積極的で、最後には直接シルヴィアを襲おうとするのに対し、ジュリアの抵抗は最後まで消極的である。五幕四場において悔悛したプロテュースをヴァレンタインが寛大にも許すことで、キリスト教的な美德が示されるとともに男性同士の友情が回復されると、今度は男性中心の友情において女性が阻害されるようになる。ヴァレンタインが、友情の証として、プロテュースに対して「シルヴィアにおける愛のすべてを君に与えよう」(All that was mine in Silvia I give thee) と提案するのである (5.4.83)。プロテュースがシルヴィアの愛を手に入れば、ジュリアも自分の恋を成就することができないばかりか、シルヴィアの愛もないがしろにされることになる。そればかりか、ヴァレンタインも自分の恋をあきらめるだけでなく、プロテュースの悔悛もふいになってしまう。このようなヴァレンタインの提案に対して、ジュリアは直接反論するのではなく、その場で失神することで彼らの注目を集める。さらには、シルヴィアに指輪を届けるというプロテュースの使いを最後まで遂行しようとする中で、自分がプロテュースにもらった指輪を間違えて渡すことにより、真実を明らかにするのである。

こうした控えめなジュリアの態度には、キケローやエリオット、カス



ティリオオーネなどが主張した友情論における助言の神髄が見られる。すなわち、苛烈な言い方を避け、相手に聞き入れられるような助言である。数奇なめぐり合わせは驚嘆を呼び、関心を集める。ジュリアの失神と指輪の渡しまちがいは、それが故意ではないからこそ、より受け入れられる。一方、ジュリアが正体を明かし、機に乗じてプロテウスに真実の愛を説くと、プロテウスもまたそれを聞き入れ改める機会を得る。助言し合う関係が築く友情は、うまく助言する者と、快く聞き入れられる者がいなければ成り立たない。ジュリアが「女が姿を変えることはまだしも小さな恥です、少なくとも男が心を変えることにくらべれば」(5.4.107-108)と、ルネサンス期における男性中心的な友情論を転覆させた主張をすると、プロテウスは男性である自分こそ移ろいやすいのだと素直に認める。プロテウスはヴァレンタインの言葉で悔悛し、ひたむきに訴えるジュリアの愛に改めて気づかされることで、自ら真の友情を担うに足る人間であることを示すことができるのである。

宮廷に仕える紳士にせよ、彼らを愛する淑女にせよ、相手を喜ばせ間接的に心を動かそうとする意味ではどちらの雄弁術も、ルネサンス期の人文主義思想からすれば「女性的」である<sup>22)</sup>。プロテウスとジュリアはその達人であり、プロテウスの一時的な倫理的欠如は最終的にジュリアのより卓越した美徳と説得術で修正され補完される。『ヴェローナの二紳士』における友情に、性差はない。実際、プロテウスはヴァレンタインへの友情と、シルヴィアへの愛情で葛藤したとき、どちらも“love”と表現している(2.4.202-203)。そしてまた、ヴァレンタインはプロテウスとジュリアが和解するとき、「二人の友人がいつまでも敵同士であってはならない」と二人を“friends”と表現するのである(5.4.117)。

## 結論

ルネサンス期イングランドの友情論は、「秀れた人々の中にしか友情はありえない」というキケローの考えに基づいているが、当時の人文主義者たちはこれを社会階層と結びつけ、教養のある人間特有の助言し合う関係が理想とされた。『ヴェローナの二紳士』においても、ヴァレンタインとプロテュースという二人の紳士は、互いに助言し合いながら友情を育んでいる。キケローの友情論では対等な友人関係が理想とされていたが、エラスムスやカスティリオーネ、エリオットなどの人文主義者は、助言が介在する人間関係を主に主従において想定した。

『ヴェローナの二紳士』においても、二人の紳士以外は主従関係において一方向的に臣下が主君に助言するかたちになっている。主従関係における助言は、本来タブーであった追従がどうしても入り混じることになる。実際、人文主義者たちの友情論においても、『ヴェローナの二紳士』においても、効果的な助言と追従は紙一重であった。プロテュースとヴァレンタインは裏切る者と許す者という関係ではあるが、程度の差こそあれ、誠実な助言と不誠実な追従を使い分けるといえる意味では倫理的にも対等な関係と言える。

キケロー以来、男性中心的に議論されてきた友情論では、「女性的な」打たれやすさ、移ろいやすさが理性的な友情と対置された。しかし、助言における美德と追従の持つ倫理的両義性を合わせて定義するとき、理想的な友情に「女性的」で柔らかな性質を認めざるを得なくなってくる。『ヴェローナの二紳士』では、二人の紳士の友情が中心的に描かれる中で、それを補完するのは貞淑な女性たちの心理的結束と、彼女たちの力強く辛抱強い説得術である。そして、そこには性差が融和し、より柔軟で強固となった人間同士の友情と絆が理想化されているのである。

注

- 1) 『ヴェローナの二紳士』の執筆年代は明らかではないが、アーデン版の編者であるWilliam C. Carrollは1590年代初期から執筆が始まり、1592年の劇場閉鎖以前には原型が作られ1594年には完成されたと推測している。出版されたものとしては、1623年のファースト・フォリオに収められている。
- 2) John D. Cox, "Shakespeare and the Ethics of Friendship."
- 3) Tom MacFaul, *Male Friendship in Shakespeare and his Contemporaries*, p. 66.
- 4) Laurie Shannon, *Sovereign Amity*, pp. 54-58.
- 5) William C. Carroll, "Introduction," p. 5
- 6) キケロー、『友情について』 p. 17, 69, 74.
- 7) Laurie Shannon, *Sovereign Amity*, p.48. ただし、Shannonはこれらをブルタークからの伝統として挙げている。
- 8) Frank Whigham, *Ambition and Privilege*, pp. 6 -25.
- 9) Sir Thomas Elyot, *The Book Named the Governor*, S 4 v. 引用箇所<sup>1)</sup>の綴りは本稿の筆者が現代英語に直した。
- 10) 『ヴェローナの二紳士』のテキスト引用はすべてアーデン版のWilliam C. Carrollの編集からである。
- 11) ここでは友人の売り込みだが、誇張して褒め称えるという意味では聞き手への追従と変わらない。
- 12) John D. Cox, "Shakespeare and the Ethics of Friendship," pp. 13-16.
- 13) Sir Thomas Elyot, *The Book Named the Governor*, A 1 r-B 7 v, Ai 2 v-Ai 8 r.
- 14) Baldassare Castiglione, *The Book of Courtier*, pp. 319-322.
- 15) アラン・ブレイは、『同性愛の社会史』の中で、主君の御愛顧を得るための表現が当時の友情論のコンテキストの中で用いられていることを論じている。pp. 175-184.
- 16) Sir Thomas Elyot, *The Book Named the Governor*, S 4 r. 引用箇所<sup>2)</sup>の綴りは本稿の筆者が現代英語に直した。
- 17) Laurie Shannon, *Sovereign Amity*, p. 55.
- 18) エリオットは女性の理性の欠如を非難する者の意見として、"And the wytte, that they haue, is not substanciall, but apyshe: neuer floryshynge but in vngraciousnesse"というのを取り上げている。ここで言う"wytte"とは、物事の道理を説明するときの言葉づかいが「巧みな」(flourishing)ものかどうかという点で議論されている。Sir Thomas Elyot, *The Defence of Good Women*, C 6 v.
- 19) Sir Thomas Elyot, *The Defence of Good Women*, D 2 v-r.
- 20) Baldassare Castiglione, *The Book of Courtier*, p. 225.

- 21) イブ・K・セジウィック『男同士の絆』
- 22) カステイリオーネは、主君の好意的な関心を引き出すための才芸は、“belong to the world of women”であるとし、“make men effeminate”するものとして挙げているが、同時にこれが主君を教化する目的には非常に有効であるとしている。Baldassare Castiglione, *The Book of Courtier*, p. 284.

#### Selected Bibliography

- Burke, Peter. *The Fortunes of the Courtier*. Cambridge, Polity Press, 1995.
- Castiglione, Baldesar [Baldassare]. *The Book of the Courtier*. Trans. George Bull. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Cox, John D. “Shakespeare and the Ethics of Friendship.” *Religion and Literature*, Vol.40, No.3 (Autumn 2008), pp.1-29.
- Elyot, Sir Thomas. *The Boke named the Governor*. London, 1531.
- . *The Defence of Good Women*. London, 1540.
- Erasmus, Desiderius. *The Education of a Christian Prince*. Trans. Neil. M. Cheshire and Michael. J. Heath. Ed. Lisa Jardine. New York: Cambridge University Press, 1997.
- Fletcher, John, and William Shakespeare. *The Two Noble Kinsmen*. Ed. Lois Potter, London: Thomson Leaning, 1997.
- MacFaul, Tom. *Male Friendship in Shakespeare and His Contemporaries*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- Montaigne, Michel de. *The Complete Essays of Montaigne*. Trans. Donald M. Frame. Stanford: Stanford University Press, 1958.
- Richards, Jenifer. *Rhetoric and Courtliness in Early Modern Literature*. New York: Cambridge University Press, 2003.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Eds. Ann Thompson and Neil Taylor, London: Thomson Leaning, 2006.
- . *The Merchant of Venice*. Ed. John Drakakis, London: Bloomsbury Publishing, 2010.
- . *The Two Gentlemen of Verona*, Ed. William C. Carroll. London: Methuen Drama, 2004.
- . *The Winter's Tale*. Ed. John Pitcher. London: Bloomsbury Publishing, 2010.
- Shannon, Laurie. *Sovereign Amity: Figures of Friendship in Shakespeare's sonnets and Plays*. Chicago: University of Chicago Press, 2002.
- Wells, Stanley. *Shakespeare, Sex and Love*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Whigham, Frank. *Ambition and Privilege: The Social Tropes of Elizabethan Courtesy Theory*. London: University of California Press, 1984.
- キケロー『友情について』中務哲郎訳、東京：岩波書店、2013年

ジラルド、ルネ『羨望の炎』小林昌夫、田口孝夫訳、東京：法政大学出版局、1999年

セジウィック、イブ・K『男同士の絆』上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋：名古屋大学出版局、2001年

ブレイ、アラン『同性愛の社会史』田口孝夫、山本雅男訳、東京：彩流社、2013年

Friendship in *The Two Gentlemen of Verona*

TAKANE, Kodai

The ideal friendship in Renaissance England was based on Cicero's *De Amicitia*, where he claimed, "friendship cannot exist except in good men." Humanists related the virtues of "good men" in friendship with the courtly advice, so that they restricted friendship within the learned. Education was only allowed to the aristocracy and the newly rising class including the humanists, so they could expect the idea of friendship to sustain their social identity and status. On the other hand, the learned had to compete with each other, and sometimes to flatter their masters and rivals in order to achieve social success, though flattery was definitely denounced in both Ciceronian and Renaissance friendship.

*The Two Gentlemen of Verona* reflects both the humanists' ideal and problem in friendship. Valentine and Proteus develop their friendship through reciprocal advice giving. However, their friendship is testified when they fall in love with the same lady named Silvia, a daughter whose father is their master, the Duke of Milan. The two young gentlemen have to develop the ideal relationship with their master, and simultaneously to compete with their rivals both as courtiers and as lovers. Valentin advises and flatters the Duke, but he cannot be so evaluated as to achieve his love. On the other hand, Proteus advises and flatter his master to achieve his favour and do the same things to his friend and rival in order to defeat them.

Some humanists excluded women from their ideal friendship, but others did not. Elyot and Castiglione argued the court ladies whose virtues are not inferior to male courtiers'. According to them, the court ladies can modestly correct the error of men. Likewise in *The Two Gentlemen of Verona*, male to male friendship is corrected only through the female advice reinforced by their chastity and female to female friendship. Sexual difference does not matter in true friendship. In fact, regardless of any sexuality, all the friendships are referred to as love in the play. Moreover, the ideal counsel is regarded as "feminine" by the humanists, because it does not offend the listeners, but indirectly moves them.

(英語英米文学専攻 博士後期課程3年)